

公益財団法人 日韓文化交流基金 NEWS

<https://www.jkcf.or.jp>



2020.10.30 No. 94

CONTENTS

- 1-2 日韓交流オンライン訪日団**
—日韓の青少年たちが、共に学び、考え、語り合う新たなオンライン交流—
- 3-5 日韓オンライン交流(第1期～第4期)を終えて**
参加者によるオンライン座談会開催
- 6-7 フェロー研究紹介**
メディアの中の日韓関係と挑戦
ソウル新聞記者 明熙眞(ミョン・ヒジン)
- 8-10 特集企画**
コラム「日韓交流 若者へのメッセージ」
- 11 交流エッセイ**
日韓交流オンライン訪日団開催!!
オンライン「日韓交流おまつり2020 in Tokyo」
ブース出展
- 12 事業報告**
青少年交流事業
広報事業
理事会・評議員会
日韓文化交流基金賛助会員制度

青少年交流事業

日韓交流オンライン訪日団 —日韓の青少年たちが、共に学び、考え、語り合う新たなオンライン交流—

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、日韓両国の青少年が直接出会い交流することが困難な状況が続いています。そのようななか、当基金では2020年4月から7月の約3カ月にわたりオンライン交流を実施しました。さらに、それに続く新しい企画として、113名の日韓の青少年が交流しながらオンライン視察や討論を行う「日韓交流オンライン訪日団」を8月末から約1カ月にわたり実施しました。

本事業は過去にJENESYS事業の一環として当基金が実施した訪日団参加者(韓国の青少年)へのフォローアップを目的に実施したものです。さらに、訪韓団参加者(日本の青少年)も加え、日韓の青少年同士が毎週土曜日延べ5日間、交流しながら共に学び、考え、語り合うことで、互いを理解し合う貴重な時間となりました。参加者たちは、ここで学んだこと、経験したことをSNSを通じて積極的に発信しています。

今後も日韓交流に深い関心と熱意を抱く日韓の青少年たちとの絆を大切に、彼らが交流し続けることができる場を提供し、お互いについてより一層理解を深め合えるよう取り組んでまいります。

● **内容紹介** 2020年8月29日～9月26日の毎週土曜日 全5回

① 8/29 「最近の日韓関係について学ぶ」

- オリエンテーションおよびグループ別交流
- 講義「最近の日韓関係について」
外務省 北東アジア第一課 日韓交流室長 武田克利氏

② 9/5 「東日本大震災からの復興について学ぶ」

- 東日本大震災被災地復興ドキュメンタリー映画
「一陽来復 Life Goes On」上映
- 尹美亜(ユン・ミア)監督によるティーチイン
特別ゲスト:映画出演者 遠藤伸一氏

③ 9/12 「福島からのオンライン中継・視察」

- 福島市内から中継視察
- 福島大学学生による発表・レポート
- 講義「福島で20年～キムチおばさんとして生きて」
NPO法人ふくかんねっと 理事長 鄭鉉淑(チョン・ヒョンスク)氏

④ 9/19 「日韓学生討論 一気になることを話し合おう」

- グループ別討論及びまとめ
- 成果報告会

⑤ 9/26 「日韓市民交流」

オンライン「日韓交流おまつり2020 in Tokyo」当基金ブース運営参加および見学



■ 第1週目 8月29日(土)

まず初めに、当基金の小野正昭理事長より、コロナ禍の中でも交流を継続したいとの参加者の熱い思いを歓迎し、オンラインだからこそ可能となった訪日団の成果に期待するとの挨拶があり、その後、プログラムに関するオリエンテーション、16のグループに分かれての自己紹介や第4週目の討論テーマ決めを行いました。続いて、外務省の武田克利日韓交流室長を講師に迎え「最近の日韓関係」に関する講義を実施しました。

講義では、1965年の国交正常化当時、年間1万人だった両国間の人的往来が、今や1000万人を超える年もあることや、1998年の「日韓共同宣言—21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ—」の意義、また第三国での日韓の経済協力の拡大などについて説明がありました。

質疑応答の時間には、日韓交流のための青少年の役割や草の根交流の意義など多くの質問が寄せられ、武田室長からは交流を通じた相互理解増進の重要性や、両国の強固な協力関係が地域の平和と安定に貢献することへの期待が述べられるなど、5週にわたるプログラムのスタートにふさわしい時間となりました。



オンライン訪日団開始にあたり挨拶する小野理事長

■ 第2週目 9月5日(土)

司会者より、東日本大震災発生当日すぐに韓国がお見舞いの声明と支援を発表し、いち早く救助隊と救助犬を派遣してくれたことや、韓国全土から多額の義援金が贈られたことに触れたうえで、東日本大震災被災地復興ドキュメンタリー映画「一陽来復 Life Goes On」(2017年製作/81分/日本 監督:尹美亜)を鑑賞しました。

東日本大震災から6年が経過した岩手・宮城・福島で、さまざまな悲しみや困難の中にあっても前を向き、寄り添い支え合いながら希望を見出そうとする人々の姿を追った作品を通し、参加者たちは、復興の様子とそこに生きる人々の思いに共感したようでした。

その後、映画を制作した尹美亜(ユン・ミア)監督に登場いただき、映画を制作することになったきっかけや撮影当時の様子などについて語っていただいたほか、3人の子どもの亡くした被災者であり、映画にも出演された宮城県石巻市在住の遠藤伸一さんにも現地からご参加いただき、お話を伺いました。質疑応答の際には、多くの質問がお二人に向けられました。遠藤さんは「寄り添い見守ってくれる人の存在が、自分を生かし続けてくれている」と参加者たちに語りかけました。参加者たちからは、「知らなかったことが多く、驚いた」、「東北に行ってきたかのように感じられた」、「映画を見ながら、そして遠藤さんの話を聞きながら、実際に自分もその場所にいたかのように胸が痛み、涙をこらえられなかった」等の感想が寄せられました。



©Kokoro Film Partners
「一陽来復」オープニングシーン



尹美亜監督(写真左側)と出演者の遠藤伸一さん

● 第3週目 9月12日(土)

東日本大震災被災地域である福島県内3カ所から当基金職員が生中継を行い、現在の福島の様子を伝えたほか、福島在住の方々からお話を伺いました。福島県観光物産館では櫻田

館長のご案内のもと、お米や日本酒など福島の誇る特産品を紹介しました。

また、福島に暮らし、福島と韓国との交流に尽力されてきたNPO法人ふくかんねっと 鄭鉉淑(チョン・ヒョンスク)理事長が運営されている「FUKUKANいやしカフェ」からの中継で、講義と質疑応答を行いました。参加者たちからは、韓国での福島に対する風評被害に関する質問も出ましたが、講義や質疑応答を通して理解を深めたようで、今後も福島について発信していきたいとの発言がありました。

また、冒頭の中継から登場してくれた福島大学学生の大越あゆみさんと齋藤里咲さんには、日程の最後に福島の各地の魅力ある場所や特産品等について、日本語と韓国語で紹介していただきました。二人は、韓国に関心があり韓国語を学んでいること、日韓交流への思いについても語ってくれました。

「コロナが終息したら、ぜひ一度福島に遊びに来てね」と鄭理事長をはじめ、大越さん、齋藤さんから繰り返し呼びかけがあり、質疑応答に登場した韓国の学生たちも「ぜひ遊びに行きたい」と笑顔で応えていました。



「FUKUKANいやしカフェ」内部の様子(写真左側)と講義をしてくださった鄭鉉淑理事長



福島の魅力について語る大越さん(写真上段)と齋藤さん

■ 第4週目 9月19日(土)

前週まで学んだ内容を踏まえ、第1週目に顔合わせを行った日韓混合の16グループで意見交換を行いました。進行役も大学生訪韓団OB・OG組織であるJKAF(Japan Korea Alumni Forum)メンバーが行い、とことんお互いの気になること、感じたことを話し合う時間となりました。参加者たちは、今回のプログラムで学んだことを中心に積極的に意見を交わしました。今後の日韓関係改善に自分たちができること、福島のイメージ改善のためにできることについて話し合ったグループもありました。オンライン視察や講義を通し、さまざまな発見と気づきがあり、何より日韓交流に関心の高い新たな友人ができたことが大きな収穫となった、と皆充実した様子で話してくれました。

■ 第5週目 9月26日(土)

韓国の学生たちは、オンライン「日韓交流おまつり2020 in Tokyo」の日韓文化交流基金ブース運営にJKAFメンバーと共に参加したほか、他のブースの様子もオンラインで見学・体験しました。昨年、当基金とJKAFメンバーが共同運営し大好評だった「韓国の若者と語ろう」を今年も開催し、韓国の市民が会話できる機会を設けたほか、韓国ドラマクイズ、K-POPクイズなど、オンラインならではのさまざまな交流が実現しました。コロナ禍で実際に大勢の人が集まることはできないにも関わらず、韓国に関心のある多くの日本人(中にはソウル在住の方も)がオンラインブースに集まり、交流を楽しむなどブースには笑顔があふれていました。

「日韓交流オンライン訪日団」の最終週にふさわしい、世代を超えた日韓市民交流が実現しました。参加団員たちも「日韓交流に関心がある日本人が多くいることを実感できた」、「韓国に関心のある方と勉強している日本語で話すことができ楽しかった」と感想を述べていました。

日韓オンライン交流 (第1期～4期)を終えて 参加者によるオンライン座談会開催

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大にともない、これまでのような相互に行き来する交流が困難な中、当基金が過去に主催したJENESYS事業の参加経験者らを対象とした、日韓オンライン交流(#おうちで日韓交流)は、さる4月開始の第1期から7月の第4期まで4期にわたり計39日間行われ、日韓双方で延べ372人が交流に参加しました。

今回のオンライン交流を通じて、参加者たちはどのようなことを感じたのか、また、この経験を今後どのように活かしたいのか、日韓文化交流基金では、8月18日にオンライン座談会を開催し、日韓両国の青少年7名に話を聞きました。

オンライン座談会出席者

日本側 ※五十音順

上原英里香(うえはら えりか)さん 獨協大学4年
須藤一磨(すどう かずま)さん 和歌山大学3年
辻萌絵子(つじ もえこ)さん 慶應義塾大学3年
靄野佑馬(つるの ゆうま)さん 九州大学4年

韓国側 ※カナダラ順

金龍會(キム・ヨンフェ)さん カトリック大学校4年
李先泳(イ・ソンヨン)さん 同徳女子大学校4年
李현승(イ・ヒョンスン)さん ソウル大学校大学院

コロナ禍の中でもつながりを求めて

—この4月から7月の間に4期にわたって行われた日韓オンライン交流ですが、今回の交流に参加したきっかけを教えてください。

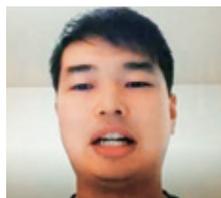
靄野

今年3月の大学生訪韓団で訪韓する予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で渡航1週間前に取り止めが決定しました。何も交流に参加できないまま学生生活を終わることになると思ったので、今のうちに出来ることには参加したいという思いで参加しました。



キム・ヨンフェ

昨年夏に韓国青年訪日団の団員として、東日本大震災の被災地を訪問しました。今は日本に行きたくてもいけない状況ですので、オンラインで友達と話したいと思い参加しました。



須藤

大学1年の時に韓国語を学び始めてから韓国に興味を持ち、昨年、訪韓団に参加しました。その後、アルムナイ活動にも参加していますが、今回コロナの影響で外に出て活動ができないため、オンラインで交流を行うとの話を聞き、これは参加するしかないなと思い何度か参加させていただきました。

イ・ソンヨン

キム・ヨンフェさんと同じ韓国青年訪日団に参加しました。日本のいろんな人と話したいと思いました。コロナ禍で日本人たちがどうやって過ごしているのか気になり参加しました。



上原

コロナ禍で自宅で過ごす時間が長くなったことで、何かしたいとの思いがありました。オンライン交流実施のお知らせを聞き、時間的に余裕のある時に、どう有意義に使うかを考え、また、直接会って交流ができない状況でも韓国の人とつながれると思い参加しました。

イ・ヒョンスン

2017年に大学生訪日団に参加して東京や北海道を訪問したのですが、コロナ禍でも交流しようという皆さんの思いや関係をつなごうという姿勢に賛同し参加しました。



辻

須藤さんと同じ訪韓国に参加して昨年3月に訪韓しました。また、昨年9月の日韓交流おまつり in Tokyoでは、ボランティアスタッフとしてブース運営に参加しました。とても楽しい体験だったので、コロナ禍でも交流を続けたいと思いオンライン交流に参加しました。

将来的にはオンラインと対面の2つをあわせて、より効果的な交流に

—オンラインでの交流を経験して感じたことはどんなことですか?また、直接対面での交流との違いなど感じたことはありますか?

須藤

僕の大学のオンライン授業では、一方通行なやり取りになってしまうものもあるのですが、一方で、今回のオンライン交流は、画面上でも相手の人の顔も見て声も聴きながらお互いのやり取りができるため、コミュニケーションも取りやすく良い形だと思いました。

イ・ソンヨン

オンライン交流の参加直後は、日本語があまり上手ではないので、自分の話が通じているか不安で緊張していました。オンラインで交流する人たちと対話を重ねる中で、次第に互いを良く知ることができて、親友のように感じられるようになりました。また、新型コロナに関する日本の現地の状況を直接聞くこともできて、とても参考になりました。

上原

オンライン交流開始までは、毎週韓国の人と交流するような機会はあまりなかったのですが、オンライン交流が始まってからは、ふと思いついたときに韓国の人と交流できるようになり、韓国のことがより身近に感じられるようになりました。

イ・ヒョンスン

訪日団で日本を訪れた時のことですが、豆腐を使ったさまざまな料理を食べておいしかったこと、雪まつりで大きな雪像を見たこと、着物を着てみんなで写真を撮ったりしたことなど、楽しかった思い出として、今でも心に残っています。このように直接体験することで長く記憶としてとどめておくことができるのが、直接対面での交流の長所ではないかと思います。一方、オンライン交流では、距離に関係なく一緒に話することができるのが便利であり、長所だと思います。

須藤

お話を聞いていて一つアイデアが浮かんだのですが、訪韓団や訪日団などの交流をする場合、対面交流の前にオンラインで事前に同じメンバーで交流しておく、実際に会った時の相手を探るような感じもなくなり、実際に対面した時の感動も大きくなるのではないかと思います。

キム・ヨンフェ

自分の専攻分野の心理学の観点から話しますと、ある出来事を人の記憶に残すためには、五感を使って、自分で体験することが効果的です。この点はまさに直接対面での交流における長所であって、オンライン交流もそれに近づける形で実施したり、オンラインと対面をミックスして行えば、さらに良い交流になると思います。

靄野

これまで韓国を訪れたことがないので、オンライン交流で他の参加者から韓国で訪れた場所のことや食べたおいしいものなどの話を聞くほど、行ってみたい、食べてみたいという気持ちが増幅されていきます。オンライン交流でのメリットは感じつつも、直接行ってみたい、食べてみたい、五感で体験したいと思

うようくなりました。

イ・ソンヨン

昨年、札幌でホームステイした時、短い時間でしたが、ホストファミリーと仲良くなって、今も交流を続けています。オンラインでの交流でも良い関係を築くことはできると思いますが、直接会って、お互いの目を見て、話をしながら相手の思いを感じながら交流することが直接交流の良いところであり、オンラインにはない魅力だと思います。

上原

直接会って同じ空間で一緒に何かをして、何かを食べたり、一緒に遊んだり、写真を撮ったりということの一つ一つが思い出になり、自分の心の中に残るのではないのでしょうか。オンライン交流ではそういった経験ができないと思いましたが、その部分をさらに補ってあげれば良いなと感じました。

交流の継続と顔の見える関係づくりが大切

一コロナ禍で、日韓の若者が心を合わせて、どのように現在の苦境を乗り越えていくべきか、そのために自分たちは何をすべきだと考えますか？

辻

オンラインの形でも可能な交流を絶やさず続けることが大事だと思っています。「直接会えないから交流はできないね」で終わりにしていると、つながりが途絶え、相手の国が遠く感じるようになってしまうと思います。友人がいることで、身近な国という感じも出てくるので、何かあったとしても好意的に見られるような視点も持つことができると思います。

イ・ヒョンスン

(相互理解を考えた場合)日本、日本人全体を理解しようと思うよりも、まずは、靄野さんといった個人で顔の見える相手や友達を理解しようと努力することが現実的だと思います。このようにしていくことで、よりお互いを理解できるようになるのではないのでしょうか。

イ・ソンヨン

私も、少しずつ関係を作っていくことが大事ではないかと思っています。関係を築き日韓双方の友達を増やすことで、良い関係になっていくのではないのでしょうか。そして、ニュースだけではなく友達から直接話を聞くことができる、そのような関係作りが大切だと思います。

上原

オンラインでの交流や日韓双方にあるアルムナイ組織などの活動が続けていくことが、まず私たちができることではないかと思っています。また一個人としては、イ・ヒョンスンさんが言ったように、韓国人、日本人といった枠ではなく、〇〇さんというように個人として接することがとても大切だと思います。そのために

も、さらに親しい関係を築いていこうにしたいです。

靄野

私も、オンラインであっても交流を続けていくことが大切だと思います。そのほかに、お互いの国のことを知らない人のために、SNSなどを使って発信することができると思います。9月に日韓交流おまつりがオンラインで開催されるようですし、今回の交流も含めてオンラインでできることはたくさんあると思うので、オンラインの可能性を追求することが大切ではないかと思っています。

キム・ヨンフェ

身近でできることとして、インスタグラムで日本人向けに、ドラマ『愛の不時着』の劇中の台詞に登場するような、韓国の若者たちが使っている新造語を紹介しています。

ポストコロナの時に、実際に会って交流することができるようになったら、共有できるものがあると話が通じやすいと思うので、今自分ができるとして取り組んでいます。

イ・ソンヨン

まずは、お互いの言葉を学ぶなど、円滑にコミュニケーションをとれるようにすることが大切ではないでしょうか。7月のオンライン交流でランゲージエクスチェンジを行ったように、お互いの言語を学びあうことで、お互いの文化を知ることもできるので、コロナ禍で時間がある今、言語をじっくり学ぶことがお互いの理解のために良いことだと思います。



このような状況だからこそ、交流したいと強く思うように

一最後に皆さんからお話しておきたいことや、コロナ禍をどのように乗り越えていくか、抱負や思いなどでもよいので、ひとことずついただけますか。

須藤

コロナ禍で直接対面の交流ができないなか、逆に何とか交流する方法はないかという気持ちが強くなったのではないのでしょうか。これまでであれば、オンラインで交流というのは考えられなかったと思います。コロナの影響で直接会えなくなると悲観するのではなく、新しい交流の形があるんだと認識できるようになりました。この後、状況が落ち着いて訪日団の学生たちが日本に来た場合には、交流活動に参加したいと思います。

イ・ソンヨン

自分でオンライン交流やSNSでの発信などできることを少しずつ行動に移していきたいと思います。そうすることで、周りの友人たちも日本にさらに興味を持つなどの変化が期待できるでしょうし、自分ができることを少しずつでも進めて行けば、いつかは日韓関係が良くなるのではないかと思います。

辻

一つの物事について、お互いに自分の国の視点だけではなく、相手の国の人たちはどのように見ているのかと考えるのが一番大事ではないかと思っています。相手の立場に立って考えることができるようになるためには、相手への親近感や好感度といった部分も大事だと思います。そのためにも今回のようなオンライン交流や日韓交流おまつりなどで、いろいろな人を巻き込んで交流の輪を広げていながら相互理解を深めていくことが大事だと思いました。

イ・ヒョンスン

私たちにとって一番重要なのは、偏見などを持たずにありのまま相手を見ることではないかと思っています。そのためにもこのような交流が大切であると思います。日本人の友達がいたり交流の経験があると、メディアによって意見が流されずに、話ができるのではないかと思います。

上原

日韓関係というとネガティブに捉えられることもありますが、日韓交流は語学を勉強したい、友達を作りたいなどいろいろな目的でツールとして使えるのではないかと思います。まずは、9月にある日韓交流おまつりにもボランティアスタッフとして参加するので、そちらを頑張りたいと思います。

キム・ヨンフェ

コロナ禍で外に出られないなか、オンラインコンテンツに接する機会が多くなりましたが、そのおかげで文化交流やランゲージエクスチェンジなどできました。

これからもお互いに近況を尋ね合い、つながりを維持することが大切なことだと思います。

靄野

今のように移動の制限がある時こそ、オンラインを使ったイベントは意義があると感じています。また自分自身こういった活動を継続していくこと、さらに学校や地域など小さい範囲でもいいので身近な範囲で韓国について知る機会を設けていくことが大切だと思っています。コロナが落ち着いて、大学生訪韓団として参加できることを願っています。

一コロナ禍で直接出会うのが難しい中でも皆さんの前向きな姿勢や交流に対する真摯な思いを改めて感じました。また交流事業のヒントになるようなお話まで聞かせていただき、ありがとうございました。

2019年度訪日フェローシップ「オピニオンリーダー育成コース」の対象者として6カ月間日本にて滞在研究をされた明熙眞(ミョン・ヒジン)氏のレポートを紹介します。

「ようやく、日本が1%見えてきた。」

日本で特派員や東京支局長など10年以上を過ごした先輩記者は、私が日本に発つ前、このような言葉をかけてくれました。異文化を経験し、理解するのがいかに困難で大変なことかを改めて教えてくれようとしたのでしょう。

2019年10月から約6カ月間、日韓文化交流基金の支援を受け、東京で過ごしながらこの先輩の言葉が何度も頭に浮かびました。地理的に密接なうえに外見も似ているせいで、深く学んだこともないのに日本についてよく分かっていると勘違いしているのではないかと。もしかしたら相手を自分の色眼鏡で分類し、判断しているのではないかと。

滞在期間中、一切の偏見なしに一度、ありのままの日本を感じてみようと思心に決めました。短い期間だけでも、今後日本を理解するための、何らかの糸口を見つけられるかもしれないという、小さな期待と共に。

◆メディアが扱う日韓関係の様相

期間中、東京在住の日本と韓国のジャーナリスト（特派員含む）を対象に「深層インタビュー」を行いました。インタビューを通じて、両国の記者が相手国とその首脳に対して持っているイメージを探ろうとしました。

私たちは国家を一つの人格として考える傾向があります。国と国との関係を「仲間」や「友達」、さらには「兄弟」に例えたり、また「敵」や「ヤクザ」、「裏切り者」などと認識することもあるでしょう。

このような認識構造の中で、日韓関係が、一気に過去を拭き去って親しい仲間や信頼できる友人の関係になることは、容易ではなかったと思います。学校暴力の加害者を優しい友人として、いじめの被害者を気のおけない友人として、それぞれ受け入れられるようになるまでには一定の時間、真心、そして並々ならぬ意志が必要だからです。

この過程で、メディアの果たす役割が少なくないということについては異論がないでしょう。しかし、これまでの日韓関係に関する報道は、国民的感受性、すなわち世論の反響を意識せざるを得ませんでした。韓国では、日韓間のもつれた歴史的な問題が、多くの国民が理解できる水準で、その時々には詳らかにならなかったという限界があります。日韓関係はまさに「愛国心」の領域とされたのです。記者たちのフレームも

そこにとどまっていたのかもしれない。

日本で出会った記者たちは皆、思慮深く、相手の国への温かい愛情を持った方々でした。最近の日韓関係の深刻さについては異論もあったもの

の、記者たちは皆、報道の在り方が、両国間の嫌悪感情を煽る可能性があることについて十分に認知していた点では共通していました。

日本の記者たちは、既存のメディアが嫌韓・反日の雰囲気震源について、「いくつかの極右勢力にある」と分析しながらも、この雰囲気を露骨にビジネスに利用していると語っていました。嫌韓・反日の声は大したことではないと感じつつも、実際には“お金になる”ので、レガシーメディアもこれを裏では積極的に流通、利用する傾向があるというわけです。

実際、昨年から、これまで小規模出版社による「右翼雑誌」が中心であった嫌韓本の出版事業に、講談社のような大手出版社が参入し始め、日韓間の軍事情報包括保護協定（GSOMIA）の終了発表とチョ・グク前法務部長官の騒動があった昨年8月から9月にかけては、「DHCテレビ」のようなYouTubeの放送だけでなく、地上波テレビのワイドショーまでが韓国叩きを始めました。韓国メディアでもこのような雰



職業柄、どこに行っても新聞社の広告が目に見え、2月に赤坂見附駅のホームで見た東京新聞の看板。カウソンのキャラクターが目玉。ユーモアたっぷりのコピーが印象的。



3月。霞ヶ関駅の読売新聞の看板。人気俳優の斎藤工を起用。

困気をリアルタイムで報道し、一般紙でも「反日情緒」を意識したかのごときタイトルと記事がしばしば目につきました。

問題は嫌韓・反日の情緒がインターネットメディア、「1人メディア」を通じて無差別に生産され、これを主要メディアが記事にする中で、嫌韓・反日フレームの強化、一種の宣伝効果を生んでいるということです。深層を暴く記事よりも対立の様相を伝えるスケッチ水準の記事が氾濫していたことも大きな問題でした。

もちろん、これらを過度に心配する必要はないという声もありました。日韓関係が急速に悪くなったときはこれらのビジネスが通用しますが、関係が回復する過程では、嫌韓や反日は売り物にはならない、という見通しだったのです。

◆責任あるメディアの姿勢

メディアの環境は、過去にないスピードで急速に変化しています。視聴率が重視され、オンラインでどのくらい読まれたかが記事の内容よりも重要な時代になりました。その結果速報性が強調され、特に刺激的なタイトルが良い記事のように取り扱われます。すべての数字は、広告単価、つまり「お金」と結び付けられるからです。

このような雰囲気の中で、日韓関係は利用しやすい素材です。読者の関心を集め、引き寄せる効果が非常に大きいからです。話題になる可能性も高い。複数の記者がインタビューで指摘してくれたように、嫌韓・反日の勢いが増しているのは、勢力を伸ばすための政権とメディアの合作なのかもしれません。

ジャーナリズムの主張は単純明快になる傾向があるのは事実です。読者や記者たちは簡潔な説明を求めます。原因が見つけられない状態を基本的に嫌います。それゆえ、因果関係の一つ、二つに特定して説明しようとする傾向があります。

しかし、すべての物事の原因は、複合的で多様な利害関係が絡んでいます。日韓関係も一つだけでは説明できない側面があります。より根本的な問題を解決するには、うんざりするようなことであっても、同じ話を続ける必要があるのかもしれない。

責任あるメディアであれば、複数の因果関係をより深く掘り下げて報道しなければなりません。

お金という現実的な問題とジャーナリズムの間で、どのように接点を見出すのがカギなのですが、ジャーナリズムを遂行しながらも、お金にもなる、より優れた方法を見つけることがまさにメディアに課せられた宿題ではないでしょうか。



東京・新大久保のある韓国スーパーで売られていた「チャパグリ」ラーメンセット。2019年初めに映画「パラサイト」が公開され、映画に登場するラーメンの作り方が話題に。映画を見た日本の知人にこのラーメンをプレゼントしたところ、好評であった。

◆責任ある国民・市民としての役割

今回の研修は、記者とメディアの境界を越えて責任ある国民、世界市民としての役割について考えるきっかけにもなりました。現在、日韓の間には直接責任を負うべき加害者、直接苦難と迫害に遭った被害者がほとんど存在しない状態です。だからこそなおさら実感のない問題として、日韓間の対立を解決していかなければならないという困難があります。

そのような視点から、日韓関係改善の糸口はむしろ民間の次元にあるのではないかと思います。私も1999年に日本の大衆文化が開放され、自然に日本文化を体験したことがあります。

記号化された人間に暴力を加えるのは簡単ですが、一度食事を共にして挨拶を交わし、小さな思い出や文化を共有する人に暴力を振るうことは容易ではありません。だからこそ日韓文化交流基金の事業、さらには民間レベルにおいて望ましい関係のために苦悩する時間がより頻繁に持たれ、広がり、深まるのが非常に重要だと思います。

国家とは、過去の人々と未来の人々のすべてをあわせて見なければならぬ概念だと思います。良いことも受け継がれますが、頭の痛いことやよくないことも受け継がざるを得ません。次の世代にどのような遺産を残すことができるのか、頭を悩ませながら、より長い目で見ることを意識すれば、私たちの関係もより良い方向に進むことができるのではないのでしょうか。



6カ月の研修を終え、受け入れ先の東京新聞社屋の前で記念写真。

研修期間中、多くの方々に支えられました。特に研修を受け入れてくださいました東京新聞（中日新聞東京本社）菅沼堅吾代表に感謝申し上げます。また、小野正昭理事長、大田高子部長をはじめ、貴重な機会を設けてくださった日韓文化交流基金にも感謝いたします。

PROFILE

ソウル新聞記者。2011年入社。社会部・産業部・政治部を歴任。ソウル新聞ポッドキャスト「時事がすこし分かるお姉さん(시사 좀 아는 누님)」を担当し、YouTubeの「パク・チウォンノ・ジョンリョルの時事整理(박지원노정렬의 시사정렬)」を企画した。現在、ソウル新聞企画取材チーム「どんなイシュー(아무이슈)」を担当。淑明女子大学校広報広告学専攻卒。



ミョン・ヒョン
明熙眞

コラム 「日韓交流 若者へのメッセージ」

交流事業において当基金は近年、特に若者の事業参加者の交流に対する意識の高まりや、彼ら彼女らの経験を生かした実践活動に手ごたえを感じていました。「アルムナイ」と称した同窓会組織も発足するなど、さらなる広がりを期待している当基金としては、現在コロナ禍で交流が中断している状況を変えていかなくてはならないと考えています。

これまで積み重ねてきた交流の灯を絶やさぬよう、「オンライン交流」など、新しい形の交流の方法を模索していますが、当基金は、若者たちが直接出会って通じ合うことが、これから先も極めて重要であり、相互理解の増進に最も寄与するものと考えています。

このような考えのもと、5月末より当基金ウェブサイトにて、互いの国に縁を持つ方や、日韓関係、日韓の交流に携わる方々に、それぞれのお立場やご経験に基づく未来の日韓関係を担う若者へ向けた励ましのメッセージをいただくコラム「日韓交流 若者へのメッセージ」を開始しました。

ここでは、これまでご寄稿いただいた内容を改めてご紹介するとともに、第3回でご寄稿くださった韓国出身の歌人であるカン・ハンナさんに改めて語っていただきました。

日韓関係の「リスクマネジメント」のために

千葉科学大学危機管理学部教授
元毎日新聞ソウル支局長

大澤 文護 さん



ジャーナリストとして長らく日韓関係を見つめ、現在は危機管理を専門に大学で教鞭をとる大澤さん。日韓関係における「クライシスマネジメント」の難しさと、「リスクマネジメント」の重要性が述べられています。

…日韓関係は昨今、「戦後最悪」といわれる状態に陥っている。その主要因となった「従軍慰安婦問題」「徴用工問題」は私が新聞社のソウル特派員だった1990年代以前から両国間の懸案だった。外交専門家が日韓関係の「クライシスマネジメント」に知恵を絞ったにも関わらず、解決できない問題として残ってしまった状態にあるといえよう。

(中略)

日韓関係の危機状況に対処する「クライシスマネジメント」は重要だ。しかし、その大部分は外交や政治の専門家の手に委ねるしかない。一方、民間交流を続ける私たちは、両国関係が今以上に悪化し、将来、

新たな問題を引き起さないための「リスクマネジメント」に、より強い関心を向けるべきではないだろうか。

何も難しいことをしようというのではない。「リスクマネジメント」の第一歩は「信頼関係構築」と「正しい情報の入手」にある。(中略)「どうせ私たちにできることはない」。そんな諦めが、両国関係を本当の混乱に導いてしまうことを私は恐れる。

どんな方法でも良い。友達を作ろう。そして話をしよう。それが日韓関係全体の「リスクマネジメント」につながることを信じて。

関心から感動へ

ソウル KIM & CHANG 法律事務所
常任顧問

小林 直人 さん



商社マンとして、経済の現場一筋のビジネスパーソンだった小林さん。日韓経済協会で経験した、両国の高校生たちの交流事業が小林さんの人生に大きな変化をもたらしました。国際交流基金ソウル日本文化センター所長も歴任され、数々の交流事業に携わってきた小林さんの「門下生」となった青少年たちは、今も各方面で日韓の交流に携わっています。

「ありがとう。また会いたい!」と別れを惜しみ、いつまでもバスに乗ろうとしない韓国の高校生たち。

「これが連絡先。きっと会おうね!」と抱き合っただけを渡す日本の高校生たち。

2004年1月、日韓両国の経済協会主催「第1回日韓高校生交流(経済)キャンプ」行事。東京にやって来た韓国の高校生50人が4泊5日の日程を終えて帰国のバスに乗り込む直前、見送る日本の高校生62人の若者たちと涙を流し、再会を誓いながら別れを惜しんだ光景が今も目に焼き付いています。

(中略)

当時の高校生たちが自発的に発足させた「日韓学生未来会議」も今年は15年目、組織として成長して来ました。先輩たちは既に社会人になった今も忙しい時間を縫って未来会議に駆けつけ、体験を共有しています。まさに国境を越えて同じ世代の人間として、どちらの国が良いとか悪いとか、勝ち負けや白か黒か、ではなく、

「国家とは？個人とは？」の議論を通じて常に学びあい、互いに尊重していく姿に私はいつも勇気をもらっています。若い皆さんの交流の継続と実行力に、私は自信をもって、日韓の未来関係を託したいと考えています。

日韓交流に心ある 若者たちへ

高麗神社宮司

高麗 文康 さん



1300年60代続く、埼玉県日高市の高麗神社。高句麗からの渡来人が遷り住み、「高麗郡」として開かれたこの地の鎮守として親しまれてきた神社の当主である高麗文康さんは、「課題があるのは交流がある証であり、動機にもなる」と語ってくださいました。

…国家間には常に課題が存在します。そして現代は意識さえ持てば、誰でもその課題を知ることができる環境があります。これも又、幸いなことだと思います。大切なことは、国際交流に心ある人々が、国家間の課題に積極的に取り組んでいくことだと思います。課題を考える過程の中で、課題の背景にある歴史、国民性を学ぶことになるでしょう。学んだ知識や触れ合った体験がより一層交流を深めるエネルギーになります。そして、深められた交流は、両国間の課題をより良く解決する力になっていきます。

国交があれば、必ず課題が生まれます。課題そのものは解決に向けた真摯な努力が必要ですが、課題があることを深刻に考える必要はありません。人間関係がそうであるように、課題が存在することは交流の証であり、動機でもあるからです。日韓交流に心ある若者にこそ、両国間の課題に積極的にアプローチしてほしいと思います。

日韓文化交流を更に発展 させるために

外務省前日韓交流室長

池田 洋一 さん



異文化交流に向かい合うからこそ大切なのは「日本についても更に学ぶこと」。学生だった1980年代に韓国語に接して以来、現役外交官としても20年以上韓国

とかかわる池田さん。世界の国々に日本を伝える最前線にいるからこそその説得力のあるメッセージです。

…韓国について学ぶために苦勞していた時代と異なり、環境が相当程度整備された現在、日韓間の文化交流を更に発展させるために、私たちができることは何なのでしょう。それは、韓国について知る努力を続けつつ、日本についても更に学ぶことだと考えます。日本文化に関心を有する韓国の方々に紹介するためにも必要ですし、日韓の文化の違いを深く分析し、更なる相互理解や交流発展のために何ができるかを考えるためにも重要だと思います。韓国の文化に興味を有している皆さんは、また新たな視点から日本文化を見ることが可能になっているでしょう。分野は何でも良いと思います。私の参加した訪韓団の中には、韓国のホストファミリーと韓国の将棋について意見を交わした将棋の有段者もいましたが、料理、音楽、舞踊、絵画等、なんでも良いでしょう。

「好き」も「嫌い」も 自分で決めよう

帝塚山学院大学リベラルアーツ学科
准教授

稲川 右樹 さん



韓国在住歴17年。今は大学で韓国語の教育に携わる稲川さん。「好き」「嫌い」の二元論にとらわれない、ご自身の韓国への思いと、韓国との付き合い方を個々人が「曇りなき眼で見定め、決める」ことの大切さを述べられています。

…韓国で生活をしていると（日本と比べた時に）「素敵だな」という部分がたくさんあります。しかし同時に「これはなんとかならないものか」という部分も山ほどあります。その度に私の感情は「好き」と「嫌い」を激しく行ったり来たりすることになります。

(中略)

これから韓国に関わっていく皆さんの中にはひょっとしたら「韓国のことが好きでなくてはいけない」という気持ちを持っている人がいるかもしれませんが、私は必ずしもそう思いません。ただ「好き」にせよ「嫌い」にせよ、それが自分で直接見聞きし体験し自分の頭で考えた上での結論であることが大切です。

(中略)

…ぜひ自分が見聞きしたことを、曇りなき眼で見定め、そして決めて、自分なりの韓国との付き合い方の道を見出してほしいと思います。

韓国と日本どっちが好きですか聞きくる あなたが好きだと答える カン・ハンナ

これは、去年の12月に出版した私の第一歌集『まだまだです』(KADOKAWA、2019年)に収録されている短歌の一首です。

まず、少し自己紹介をさせていただきます。私は日本に来て9年目となる、韓国出身のタレントで歌人でもあります。

また、横浜国立大学大学院の博士後期課程で韓国と日本を中心に国際社会文化を研究しています。来日した2011年にはひらがなさえ読めなかった私ですが、今は1300年以上の歴史を持つ日本の伝統文学、短歌を通じて自分の思いを伝えており、日本語が母国語ではない初めての外国人歌人として、日本で本を出版することができました。

もちろん、他国の日本で自分の道を見つけ出し、目標や夢に向かって進んでいくのはそんな簡単なことではありませんでした。今までの9年間もそうでしたし、これからも色々と感じが必要だと思っています。ただ、これを読んでくださる方々に私が一番伝えたいのは、「自分の心が動く道を信じる」ということです。そしてそこには日本だから、韓国だからといった固定観念を持たないでほしいということです。

日本で頑張りたいと思った理由

確かに日本と韓国の間には政治外交問題や歴史問題など複雑な関係が続いていますし、少し時間が経てば明るい未来が必ず来るとも言い切れません。私も日本で活動する韓国인으로して周りの人々から「なぜわざわざ険しい道を選んだの?」とよく言われます。しかし、誰にどう言われても私が日本で頑張りたいと思ったことには理由があります。

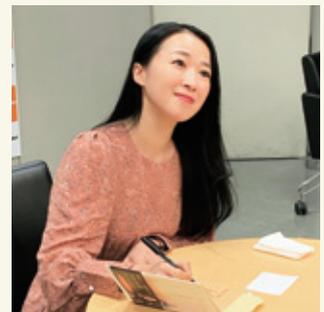
韓国時代の20代の頃、私は自分の進むべき道に迷っていました。若かったが故の不安や悩みがたくさんあり、一度立ち止まって考え直したいと思っていました。それで訪れたのが日本の宮島でした。一人旅で来た宮島は、穏やかな空気感で私を癒してくれました。長い歴史を持つ日本の伝統文化は町のあちこちに引き継がれており、神様を祭る神社や親切的な日本の方々、素朴なご飯など、私の目に留まるすべての風景が素敵でした。そして全く詳しくなかったのですが、奥ゆかしい日本文化が好きでした。その時に私は強く思いました。日本のことがもっと知りたい、日本の人々ともっと仲良くなりたい、いつか日本に住んでみたい、そしてその先にはきっと私の人生への大事なヒントがあると思ったのです。

すべてを自分の目で見て、自分で感じて、自分で判断する

その4年後、私は一人の知り合いもいなかった日本に住むことを決心しました。今思うと日本語も全く喋れないの

に、どこからそんな勇気が出たのか自分自身も信じられません。ただし、私は旅立つ時に、「これからどんなことが起きても、すべてを自分の目で見て、自分で感じて、自分で判断する」と決めました。特に、情報量の多い日本と韓国の間だからこそ、そう心掛けたかもしれません。ここで私が自信を持って言えるのは、自分の経験を大事にしていくと、もっと素敵な出会いや出来事が訪れますし、今まで想像もしてなかった新たな未来がきっと待っていることです。

日本に来た2011年、その当時の私は、日本のテレビに自分が出ることも、短歌と出会い、歌人になって日本で本を出版することも想像していませんでした。ひとえに目の前のことへ誠意を尽くすこと、そして一人一人に感謝の気持ちを伝えること、どんな時でも固定観念を持たないこと、この三つを大事にただけです。あとはすべて日本の方々に支えられ、今まで夢にも思わなかった色んな世界に入らせていただいたと思います。



出版時のイベントにてサインをする
カン・ハンナさん

あなたとしてのあなたが好き

私にとって日本と韓国はどちらも大切な場所です。それは「国」という意味ではなく、私が愛する人々、そして心から感謝している人々がいる場所だからです。冒頭の短歌はその思いを込めた一首となりますが、これからも私は日本人のあなた、韓国人のあなたではなく、「あなたとしてのあなた」の一人一人と向き合っていきたいと思います。そして、今の時代に私と同じ気持ちを持つ人々が日本と韓国でどんどん増えることを、心から願っています。それこそが日本と韓国の今の関係に、まぶしい光を与えてくれる存在になると信じているのです。

“ハングルを混ぜた短歌に文学は平和であってほしいと願う カン・ハンナ”『まだまだです』(KADOKAWA)

PROFILE

韓国ソウル市生まれ。来日9年目。現在、NHK Eテレ「NHK 短歌」レギュラー出演中のほかテレビやラジオなどでタレント活動中。角川短歌賞に3年連続入選(第63回角川短歌賞次席)し、第一歌集『まだまだです』(KADOKAWA)を出版。横浜国立大学大学院博士後期課程に在学中。



タレント・歌人・国際社会研究者
カン・ハンナ
(강한나)

交流エッセイ

◎日韓交流オンライン訪日団開催!!

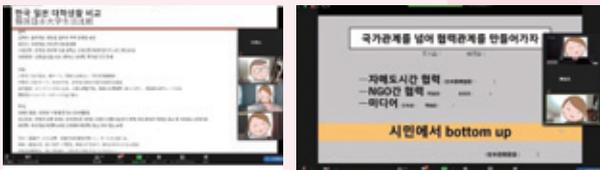
JKAF会長（2017年度日本大学生訪韓団参加）**渡辺 一花**

8月29日から9月26日の毎週土曜日に日韓文化交流基金主催のオンライン訪日団が開催され、JKAFメンバーが訪日団参加者と交流すると同時に、運営にも携わらせていただきました。

オンライン訪日団には、外務省から講師を迎えての日韓関係のブリーフィング、東日本大震災のドキュメンタリー映画の鑑賞、福島市との中継での交流、討論等のさまざまなコンテンツが盛り込まれました。初日のブリーフィングでは日韓関係の現状や日韓の貿易・人的往来・交流・投資等、普段は知ることの難しい分野についても学ぶ良い機会でした。講義を聞いた後、熱心に講師の方に質問する韓国側参加者の方の姿も印象的でした。

グループ交流では自己紹介、コロナウイルスの現状、日本／韓国が好きなの理由を共有する等、日ごろから日韓交流に関心が高いためか、どのグループもすぐに打ち解けることができていました。なかには高校生、大学生、社会人等幅広い世代が揃うグループもありました。参加した坂井絢香さん（長崎大学3年生）は、「日本語の勉強を始めてまだ1カ月の韓国人の方が日本語の挨拶を練習してきてくれてとても嬉しかった」と述べられました。

第4週目には「コロナ禍における新たな交流方法／日韓関係」というテーマで討論会が行われ、JKAFメンバーが司会を行いました。どのグループでも白熱した討論が行われ、韓国／日本に行きたいという気持ちがより大きくなりました。今回オンラインで出会った友人と早くオフラインで出会える日が来ることを願っています。



第4週目の討論会では、各グループが討論内容について発表しました（一部イラスト加工してあります）

◎オンライン「日韓交流おまつり2020 in Tokyo」ブース出展

JKAF実行委員（東京大学大学院修士2年）**新里 智樹**

さる9月26日、今回で12回目を迎える「日韓交流おまつり in Tokyo」が「心あわせて乗り越えよう」をスローガンにオンライン上にて開催されました。JKAFでは日韓文化交流基金主催のオンライン訪日団に参加している韓

国の大学生や青年たちと協力し、「おうち時間は韓国人の若者とおしゃべりしよう～ステイホームでできる日韓交流～」と題して、日韓の市民が両国について会話したり交流することができる「交流トークルーム」を設けました。こちらは昨年大きな反響をいただいた交流ブースをオンライン上で行う試みであり、その他にも「韓国関連クイズ大会」のコーナーを設け、この状況下でも幅広い層の日本の方々から韓国の方の生き方・考え方への理解を深めてもらうきっかけとなりました。

「交流トークルーム」には、わずか4時間の開催にも関わらず合計で29名の方が参加していただき、日韓の間にある歴史的問題に関する意見や経済・教育・文化・仕事・大学生活の違いなど、日韓に関する幅広いテーマについての討論が行われました。また、韓国の大学生から日本について質問をする場面も見受けられ、日本に対する理解をより深める機会になりました。当日協力してくれたオンライン訪日団員からは「外出自粛期間中は、日韓の若者共に、どうぶつ森などのゲームやダルゴナコーヒー作りなどをやっており差はあまり見えない」、「いつか韓国語を日本人に教える先生になりたい」等の意見があり、また交流トークルーム参加者からは「こういう機会があって嬉しい」、「毎年韓国に行っていたので、早くコロナウイルスが落ち着いて、韓国に行って元気になりたい」という声が聞かれました。

今回の交流ブースでは、日頃ニュースなどで見聞きする情報や疑問について意見交換を行うことで、韓国の方の考えを知ることができ、多くのことを学ぶことができました。

また、初の試みとなる「韓国関連クイズ大会」では、K-POPイントロクイズ・K-POP歌詞当てクイズ・韓国ドラマクイズ等を行い、大いに盛り上がりました。また、一通りクイズが終わった後に、K-POP・韓国ドラマの人気投票を行い、結果をSNSに載せることで多方面からのコメントをいただきました。

JKAFは今後も日韓関係の軸となる民間交流を絶えず推進していきます。



当基金ブースの交流トークルームに参加した後の記念撮影の様子（一部イラスト加工してあります）

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2020年4月1日から7月31日までの実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

日韓オンライン交流事業(全4期:計39日間、延べ372名(日本側196名、韓国側176名))

第1期	4月20日(月)～5月1日(金) 9日間(月～金:午前・午後)延べ118名(日本側58名、韓国側60名)
第2期	5月12日(火)～5月30日(土) 9日間(火、木、土:午前・午後)延べ101名(日本側53名、韓国側48名)
第3期	6月2日(火)～6月27日(土)12日間(火、木:午後、土:午前・午後)延べ85名(日本側46名、韓国側39名)
第4期	6月30日(火)～7月18日(土) 9日間(火、木:午後、土:午前・午後)延べ68名(日本側39名、韓国側29名) ※第4期はランゲージエクスチェンジ版として実施

2 広報事業

当基金ホームページにて、コラム「日韓交流 若者へのメッセージ」を5月末より特別企画として掲載しています。

3 理事会・評議員会

6月8日の第85回理事会、6月26日の令和2年度定時評議員会において、令和元年度決算が承認されました。

4 日韓文化交流基金賛助会員制度

日韓文化交流基金では、当基金が実施する諸事業の趣旨に賛同くださる皆様からご支援をいただきたく「賛助会員制度」を設けております。皆様からいただいた賛助会費は、当基金の事業費の一部に充当され、日韓文化交流の発展のために活用されます。ご支援を賜っております皆様にあらためて感謝いたしますとともにさらに事業の活性化を図るため尽力してまいります。

2019年度賛助会員リスト

(2020年3月31日現在有効会員、五十音順、敬称略。
カッコ内の数字は2口以上の口数)

特別会員(5名)

小野正昭(3) 金春美(3) 中江新(5)
檜崎正博(3) 渡辺浩(3)

個人会員(54名)

青野正明 朝倉敏夫 浅野豊美 阿部孝哉 安倍誠
飯島渉 石川武敏 磯崎典世 稲葉真岐子 李炯喆
林在圭 内田富夫 及川俊男 大竹洋子 河村建夫
菅野修一 木畑洋一 木宮正史 小林直人
小針進(2) 高麗文康 坂井俊樹 阪田恭代

酒匂康裕 櫻井浩 佐藤俊行 鮫島章男(2)
澤岡泰子 穴戸秀行

柴公也 社会福祉法人陽清学園柴田昌子
白川豊 杉山長 高田加代子 田中正敬
都恩珍 中尾美知子 中塚明 中山めぐみ 西澤豊
波田野節子 墨の美術館濱崎道子
日本民芸館館長深澤直人 福原裕二 藤田昭造
藤本幸夫 堀泰三 前田二生 馬定延 松井貞夫(2)
實生泰介 茂木敏夫 余田幸夫 和田とも美

法人会員(2団体)

学校法人城西大学(10)
和光物産株式会社(5)

表紙 作品紹介



高麗(こま)神社(作者:下地富雄)

埼玉県日高市に所在。716年、時の大和朝廷は、駿河、甲斐、相模、上総・下総、常陸、下野の七国から高句麗人を武蔵国に移し、現在の高麗神社付近を中心とした埼玉県中西部に「高麗郡」を創設、高句麗の王族、若光(じゃっこう)をその郡主に任じました。高麗神社は若光を主祭神として祀っており、出世開運・事業繁栄・子孫繁栄・延命長寿の神として知られています。